

『物語と歴史の文化学Ⅲ』

LIBRARY ICHIKO 154 SPRING 2022 4月30日 発売予定

たいへんな世界情勢になってしまった。自分の友人や知人がいる場所で、戦争がなされるのは初めての経験になる。かかる侵略愚行が世界を揺るがしてしまう「隙間」は、古代から人類が克服しえていないのも、自分へ向けて嘆かわしいことであるが、文化の重要さのみがそこを超えていくとつかない。折口信夫が、源氏物語が領有されていたなら太平洋戦争は起きなかつたであろうとつぶやいた。その根源の明証化だ。

ウクライナにはブルガーコフなる偉大な作家がいた。本誌でも特集を2度にわたって組んだが、スターリン圧政の中で自らの文学的表出を諦めなかつた作家だ。圧政下では哲学・思想が生まれるより音楽や美術や詩・文学の芸術の方が高度になる。

哲学者にならずに作家になった文学者たちがいるからだ。そこには物語性が高度に想像的創造されている、哲言で語りえないことを語りえているからだ。歴史性が、現実的・物質的なものよりも、本質的に把握されていた。ムージルやブルガーコフやドストエフスキーなどであり、日本では太宰や石川淳などがいたし、源氏物語など不滅の次元を表出している。

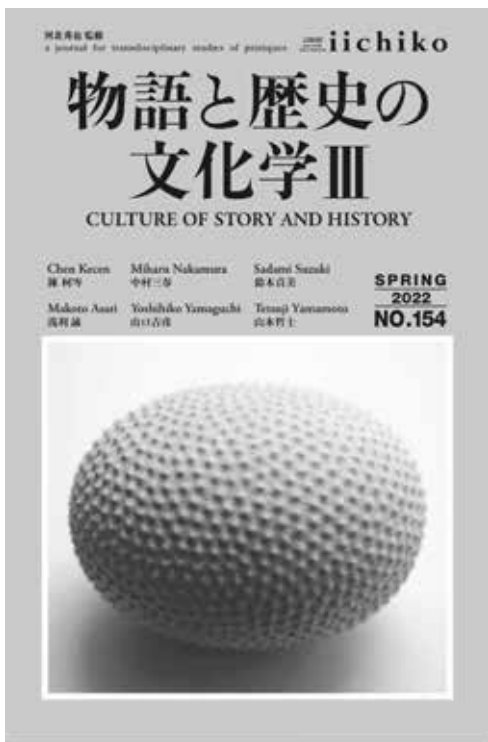
言語でしか語りえない本質と存在の間に、哲学的な概念とは異なる文学的概念が存在している。それは哲学表現のような否定媒介をとらない。その心的表出は、現実界との絡み合いの中で、どのような表出様式になっているのか、文学理論は今、そこに近づきつつあるが、ジュネットのような過剰言表の氾濫となって概念構成にはなっていないし、ド・マンのような哲学的膠着状態になってしまっている。わたしが仮説しているのは、言語思考の主語制の暗黙概念が、歴史を外化してしまい、主客分離の歴史性しか領有していないためだと思いが、日本文学には本質的に述語制言語であるため、近代西欧が把握できない次元を論理表現しているのではないかとこのことだ。これは言語理論と文学理論の批評的言語が媒介的にしつかりしていかないと把握できない閾になるからではないか。友人のアンドリューはコンシアンスをキー概念対象にして、経済思想とシエイクスピアやブルーストを同時的検証したが、哲学や言説理論はあるが言語理論はないものの、ヘイドン・ホワイトよりは対象へくひこんでいる。

表出様式と心的現象と幻想構造という本質尺度を、思想ではなく理論生産していかないと、歴史的現存性へ肉薄できない。つまり、まだ問題構成が確然となされえていないのだが、この「物語と歴史」の連続的検証をへながら明証にしていきたいと考えている。

文化の根元は、文化技術(伝統的技芸)と美術技術と文学技術における言語技術にある。道具による時空の構成的表出であつて、メタファーとかメトニミーという次元ではない。そこを哲学概念、技術概念、言語概念の新たな次元が開削されることだ。日本文学を対象にしていくことから普遍が見出せていくと思う。

▼陳柯岑「パン屋再襲撃」論——現実と虚構のはざま」▼中村三春「虚構論と物語論」▼【対談】鈴木貞美×山本哲士「物語と歴史」の関係へ(1)」▼鈴木貞美「なぜ、日本におけるナラトロジーが必要か(2)」——ヘイドン・ホワイト「メタヒストリー」もしくは類型に憑かれた知性」▼山口吉彦が見たアマゾンの世界と収集の技術」▼浅利誠「述語制言語の日本語とコブラ」【連載6】▼カラー特集「AMAZON 山口吉彦「トクシ」」

『LIBRARY ICHIKO』は季刊誌です。次号は二〇二二年七月末発行予定



【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文は「RCC」→ Fax. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

物語と歴史の文化学Ⅲ

LIBRARY ICHIKO 154 SPRING 2022 1950円(税込)

ISBN 978-4-910131-29-0 C1010 ¥1500円

書店名

部数